

古川柳研究会会報

一四九号

平成二十年八月

川柳評万句合明和四年論議

平成二十年六月十四日

礎講 新井 久

明四松2続き

41 × 戻りにハ下々にくで源左衛門

(戻りには下に下にて源左衛門)

『鉢木』の句。時頼から本領を安堵された上に、三箇の荘を頂戴した源左衛門、江戸時代の「下に下に」の大名行列よろしく意気揚々と鎌倉から戻ってきただろう。

佐野の馬かんろのやうな豆を喰^ヒ 初³⁵

42 × 此かさで禿三ッハのむといふ

(この蓋で禿三ッは飲むと言う)

里人に接する機会が無いので疱瘡に罹らないという意とした。

席上では、二つの諺の援用がミソの句であるから句意曖昧だが、「疱瘡の山を見ず」は「病状が重い」の意で、殺生をする猟師の生業の因果が子に報いるというパターン句の一つとして、子供の疱瘡も重いのだという意とされた。

狩人の子て人並に生^レつき 宝九桜

44 ○ ぞんねんがかゝらいでハと三浦いゝ 拾五24

(存念が掛らいではと三浦言い)

存念Ⅱ①強く心にかけて忘れないこと。②特に恨みの念や、強い執念に用いることもある。(角川古語)

高尾吊し切りの句。高尾が惨殺されたことを聞いた三浦屋が、こちらへも高尾の怨念がきつとかかるだろうと恐れている。

席上では、三浦屋が綱宗に怨念が掛かることを案じているとの意見あり。

三浦でも駕でやらぬを後悔し 明三仁1

45 ○ 旅芝居らしいと忝のうへでいゝ

(旅芝居らしいと松の上で言い)

蓋Ⅱ(笠の転義)塗り碗のふた。(江)

吉原の客が「この禿はお碗の蓋で三杯も酒を飲むんだよ、あきれたねえ」などと言っている様子。

席上では、禿自身がそう言っているとした方が面白いとの意見あり。

しかられにや禿一ッはいのむ気なり 明三智3

43 狩人の子ハほうそうの山を見ず

(狩人の子は疱瘡の山を見ず)

疱瘡の山を上げるⅡ疱瘡が順調な経過をたどり回復期に近づく。この時期に手当を誤れば、あばたづらになるという。(日)

鹿を逐う猟師は山を見ずⅡ一事に熱中すると、他の事をかえりみる余裕がないことのたとえ。(日)

礎講は、二つの諺を踏まえて、山奥に住む猟師の子は

ここで「松の上」は、盗賊熊坂長範の「物見の松」。

礎講は、熊坂長範が物見の松の上から旅人を発見し「旅芝居の一行らしい、いい鴨だ」と言っている様子とした。

席上では、①旅芝居は荷物は多いが金目の物は持っていないので、襲うことはやめようと言っている様子②熊坂長範が金売り吉次一行を襲うパターン句の一とし、同行している牛若丸を芝居の子役と見誤った光景、との二説が出され、②ということに。

いゝ鳥がきたぞと松のうへて言^イ 二九33

46 ▲ 上下でたおれて居ルが仲人さ

(袴で倒れているが仲人さ)

婚礼の宴会で、仲人が泥酔し袴姿のままで倒れている。

色直し迄ハ仲人きん酒なり 天二礼2

47 × おく様もしづかぐらひハ御手がきゝ

(奥様も静ぐらひは御手がきき)

手が利くⅡ手先の仕事が上手である。腕がたつ。(江)

奥様も静御前ぐらひは腕が立つということ。静の堀川夜討ちでの奮戦を踏まえて長刀の技量をいうのだろう。

席上では、鼓の腕前との意見もあった。

長刀の流義を残す白拍子 二六10

48 ○ 姫のしちのこらず請るむづかしさ

(嫁の質残らず請ける難しさ)

礎講は、持参嫁の離縁の句とし、質入れしてある嫁の荷物を戻すために全部請け出すのは、資金が無く難しいという意とした。

席上では、嫁の質を一举に全部請け出さなければならぬ事態になったのは、難しい事情すなわち離縁という事情があるからだとの意ということに。

姫のしちのこらす出^へと半つづれ 明八義²

49 × 町風かなど、御針に見てもらひ 五⁹

(町風かなどと御針に見て貰い)

礎講は、廓から花見などに外出させてもらう遊女が、外出用の服装をして「町娘に見えるかえ」などとお針に見て貰っている様子とした。

席上では、①特に馴染み客に連れられて芝居見物などに行く場合、②年明けの遊女の様子を詠んだものとの意見があり、結局諸説有りということに。

町^チ風にばけて一^チ日気をはらし 明元梅¹

50 ▲ 寐せつけておりはの乞^イ目しかりに来 拾初¹⁰

(寝せ付けて折羽の乞い目叱りに来)

かれた客が酔った勢いで給仕の下女に悪態を突くので、その意趣返しに下女がご飯をてんこ盛りにして出し、残さず食べるよう強いる様子とした。

席上では、夷講に限定すべきか議論があったが、結局礎講通りと言うことに。「毒」と「盛る」が縁語。

ゑひす講上戸も下戸もうこけへず 一一⁶

53 × 大三十日もふ^ッけん^にた^ッき付^ッ

(大三十日もう一軒に叩き付け)

叩き付けるⅡ①たたいてものにぶつつける。②幼児を叩いて寝かしつける。③自分の考えを無理に押し付ける。④激しい勢いでものを差し出す。⑤仕事などを手早くかたづける。(目)

礎講は、「叩き付け」を⑤の意として、大三十日に掛け取りがもう一軒にまで手早く片付けた様子とした。

席上では、

(1)「叩き付け」を前述③の意とし、掛け取りに對してあれこれ交渉し、やっともう一軒にまで漕ぎ着けた様子との意見、

(2)②の意味として喧しい掛け取りがあともう一軒だけになって、母親が子供を寝かしつける場面との意見、が出たが、結局、(1)ということに。

折羽Ⅱ双六の変種で、方法の簡単なもの。双方十二個ずつの石(白黒)を持ち、二個のサイを竹筒に入れて振り出し、出たサイの目の数ほど駒を取り合い、多く取った方を勝ちとする。(江)

乞い目Ⅱすぐろくなどで出てほしいと思っているサイの目。(目)

双六遊びに熱中した連中が、乞い目を大きな声で叫んだりして喧しいので、ようやく子供を寝せ付けた母親が、

「もう少し静かに遊びなさい」と叱りに来た。

おりはをはやめてくりやよと産婦いひ 九⁶

51 × よさハよいがとハ女のそねミなり 五⁹ 拾十¹⁵

(良さは良いがとは女のそねみなり)

「いいことはいいい女だけだ」と一応は賞めておいて、「でも、あの人はねえ」などと欠点をあげつらうのは、女特有のそねみ(ねたみ・嫉妬)である。

よい女とこそか女房きずをつけ 拾二¹⁶

52 ○ どくをいふのへ御きうじハもりつける 五⁹

(毒を言うのへ御給仕は盛り付ける)

毒を言うⅡ悪口を言う。憎まれ口を利く。(江)

礎講は『教養文庫』の解を頂戴するとして、夷講に招

54 ○ ふんぬきか能^イと妾かき廻ハし 拾一⁰ 29

(打^だ抜きがよいと妾がかき回し)

打抜きⅡ茶碗などに入れ、逆さまに抜いて盛った飯。

中間などの食する盛り切り飯。(江)

礎講は、妾が打抜きの五目飯を作るために、飯をかき回している様子とした。

席上では、妾が「私は打抜きがいい」と我がままを言つて周囲に迷惑を掛けている様子(かき回し)と思われるが、状況がはつきりせず、不明句ということに。

55 × 旅かへり直^ッにさつてや寄^ッて来^ル

(旅帰りすぐに幸手屋寄つて来る)

幸手屋Ⅱ日本橋小伝馬町の薬屋幸手屋茂兵衛。虱うせ薬で有名。転じて、虱駆除薬の異称ともなる。(江)

礎講は、旅から帰つて来た人の所へ、直ぐに幸手屋が薬の売り付けにやつて来た様子とした。

席上では、旅帰りの人が道中で取り憑いた虱駆除のために、まず幸手屋へ立ち寄つて薬を買ってくる様子というところに。

旅かへり喰れぬいたとぬひで出^ッ 明三松⁴

56 ほとほりをぬく内娘掛^リ人 拾三⁸

(ほとほりを抜くうち娘掛人)

礎講は、素行不良で悪い評判が立った娘を、居候扱いにして懲らしめている様子とした。

席上では、悪い評判が立った娘をしばらく親戚にでも居候させて、世間の噂のほとほりを冷まそうとしているということに。

こらしめの為に稲毛の伯母へ遣^リ 明二礼⁵

57 ○ ほうづきをつぶして座頭にちられる

(鬼灯を潰して座頭にちられる)

にちる^ニ詰問する。(江)

座頭が、その辺に置いてあった鬼灯を誤って踏みつぶしてしまい、大事にしていた子供に文句を言われているといった光景であろう。盲目のため何かと不始末もあるのである。

おつはなす座頭桜につきあたり 明三礼¹

58 ○ こふくやへ来て迄すねるひそうむす 五⁹

(呉服屋へ来て迄拗ねる秘蔵娘)

秘蔵^ニ①大切にすること。②秘蔵子の略。(江)

大事に育てた箱入り娘がすっかりわがままに育ち、家

その針口を、天秤に付属する小槌でたたいて振動させる。
(目)

夕下がり^ニ午後八時頃。(日)

夕下がりの頃、両替屋へ両替金を持ち込んだ客が、手代などがその金を秤に掛けているのをのぞき込んでいるという句のようである。

席上では、「ならず」は「均す」(竿を平衡にする)

ではないかとの意見あり。

てんびんをた^く手代の目かすわり 明元信⁵

62 × 手を取て子になでさせるかもの腹 五⁹

(手を取って子に撫でさせる鴨の腹)

年末に鴨を料理するような場合に、傍で見ている子供が気味悪がったりするので、親が手を取って鴨の腹を撫でさせている様子。

青首をさかさになで^くしかられる 七⁹

63 × 大寺の田うへそろへるかねをつき

(大寺の田植え揃える鐘を撞き)

礎講は、大きな寺の田圃を檀家などが大勢で田植えをするとき、作業を揃える(一斉に行う)のに鐘を撞いて合図にする様子とした。

の中ばかりでなく呉服屋へ来て迄、あれこれ拗ねて文句ばかり言う。

惜しそふに秘蔵娘を人に見せ 一三二²⁵

59 × 吉三には寺号を一^チ字御さづけ

(吉三には寺号を一字御授け)

八百屋お七の恋人吉三郎の句。吉三郎は駒込吉祥寺の寺小姓とされているので、その名は寺号の一字「吉」の字を授けられたのだらうと。

吉祥寺ほのかに聞^イてくろうかり 安元梅⁴

60 ○ 女房ハ何^サくと三ツへし 五⁹

(女房は何さ何さと三つ減し)

女房は、他人に物をあげるような時に「何さ何さ、そんなにあげることはないよ」などと言って三つほど減らしたりする。男の目から見て女はそんなものだという句。けちなこといふなと女房しかられる 明三桜⁶

61 ▲ てんびんをならすをのぞく夕下^リ

(天秤を鳴らすを覗く夕下がり)

天秤を鳴らす^ニ天秤にはかつて金銀の受け渡しをする際、さおの平衡を示す針口の針の動きを調節するために、

席上では、田植えをする人を揃える(集合させる)ために鐘を鳴らすのではないかとの意見があったが、礎講通りということに。

64 × 甲州ハ塩も菩薩の数に入り 拾三²⁴

(甲州は塩も菩薩の数に入り)

「菩薩」は米の異称。一般に米は菩薩といって大事にされるが、山国甲州では塩も同様に貴重な物とされる。謙信が塩を送った故事を匂わせる。

やき塩ハ信玄きつい奢^リなり 六³²

65 ○ わか書た顔で師直遣て見る

(我が書いた顔で師直遣てみる)

『太平記』に見える高師直の横恋慕を詠んだ類句多数の一。恋文を兼好に代筆させたのに、自分で書いたような顔をして遣てみる。

自筆たといへとちしうに渡^スなり 安四義⁶

66 ▲ 台のものとたりへ出たてあんどする 五¹⁰

(台の物隣へ出たて安堵する)

台の物^ニ遊里で台屋と呼ばれた仕出し屋から、茶屋・遊女屋へ運び込まれた料理品。大きな台にのせて松竹梅

などの形に飾り付けた。(目)

登楼していると、台の物が廊下をやって来る気配がする。遊女屋が勝手に注文したかとハラハラしていると、隣座敷へ運び込まれたようなので、ホッとしている懐の淋しい客。

す壹歩ハげしなりませであんどする 四 18

67 ○ 掛^ケ乞^モ二三丁程春をふ^ミ 五 10

(掛け乞いも二三丁程春を踏み)

大三十日の夜を徹して集金に回っている掛け取りが、明け方になってもまだ少し残った集金のために歩き回っているのを「春を踏み」と表現したもの。

かけ取りのとほして来^ルて春てなし 明四松 3

68 × 太神楽跡^ト足斗^リくつを打^チ

(太神楽後足^{あとあし}ばかり杓を打ち)

杓を打つ^{||}①わらを打ってくつを作る。②馬にわらじをはかせる。(目)

太神楽の獅子舞の句。礎講は、二人使いの獅子舞の後ろ足が目立つ様子とした。

席上では、獅子舞の前足が草履履きで後ろ足がわらじ履きらしい絵があるので、これを観察して詠んだ句だろ

うということに。

太神楽にた山て済^ム跡^トの足 明元松 4

松 3

1 ○ いつ方に成たと姑^{いっぼう}くちをい^ハ

(一方に成ったと姑愚痴を言い)

姑が「一方に成った」と愚痴を言うといっているのであるが、息子が「嫁一方」すなわち嫁の機嫌ばかり取って、母親の言うことなど聞かなくなったということであろう。

まきこまれきつたと嘶^ヒす姑^ハ 八 7

2 ○ 大三十日ゑんまの所か本の事

(大三十日閻魔の所が本の事)

俚諺「借りる時の地藏顔、返す時の閻魔顔」を踏まえて、大三十日に掛け取りが売り掛け先へ集金に行くのは、まさに閻魔の所へいくようなものだ。

鬼が来て焰^ヒ戸を責る大晦日 一六七 15

